法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

『近代思想』以前の荒畑寒村について

堀切, 利高 / HORIKIRI, Toshitaka

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
26
(終了ページ / End Page)
35
(発行年 / Year)
1959-08-16
(URL)
https://doi.org/10.15002/00018974

『近代思想』以前の荒畑寒村について

堀切利高

大杉栄と荒畑寒村が刊行した雑誌『近代思想』(第一次)についての論稿は最近相次いで出ているので、ここで同じことに触れる積りはない。(注一)

しかし、その中では詳しい西田氏の論稿においても『近代思想』以前の荒畑寒村の文学歴については「火鞭会文学運動以前からの深い影響をはじめとして以後ほぼ大杉と同様の閲歴をつみかさねることになる。ところで彼はすでに明治四〇年ごろ横浜遊廓を背景に少年の感傷を織りまぜた美しい短篇『舞姫』を書いて、山口孤剣から一葉の『たけくらべ』を連想させるものと激賞され、注目されている。寒村の小説はまったく素人芸ではなかったわけである。」と紙面の都合もあって簡単に記されているだけである。

私は前から小説家としての寒村の登場があまりにも突然のようなので、一体そこは具体的にどうなっているのか、そこのところを是非知りたいと思っていたのである。

「舞ひ姫」に流れる感情と「艦底」に流れる感情は底辺で結びつくような気はするが、技法には飛躍があるのだ。

まして「舞ひ姫」から「冬」「夏」「逃避者」「一挿話」に連らなるには、もう一つか二つ掛け橋が必要に思うのである。

堺利彦の言うように、荒畑は「天性の文学者」であったでは困るし、自然発生的という、十七世紀のスワンメルダやレーディ以来縁のなくなった筈の言葉でかたづけるのも困るのである。

明治から大正へという時期における『近代思想』の位置の重要さ。労働文学との直接的な関係、ひいてはプロレタリヤ文学の先駆的な作品という以上に明治期社会主義文学の一つの到達点ではないかと推察する点からも、そこの処を知りたいのである。

寒村の履歴について既に自伝もあるので『近代思想』発刊までを簡略に記すと、

寒村本名は勝三、明治二十年八月、旧幕臣の荒畑岩吉、サダの第四子(次男)として横浜に生れた。家は横浜遊廓内にて台屋、後に引手茶屋を営んでいた。明治三四年、小学校高等科卒業(いわゆる学歴としてはここまでである)経済的事情もあり海軍へ進む志望は

挫折し、外国商館に勤める。この頃、海岸教会(日本キリスト教派)に出入し、三五年、ゼームズ・バラの手によって受洗する。三六年三月、報効義会に入会し、その線より横須賀海軍造船廠に木工部見習職工として勤める。同じくこの年萬朝報を通し、堺、幸徳、内村の文に接し、影響を受ける。十一月、『週刊平民新聞』創刊。三七年一月、社会主義協会に入会する。七月、横浜平民結社(後の曙会)をつくる。九月、反戦を説く夢を持ちつつ満洲へ軍属としてゆく、十二月帰還。三八年一月、母死す。四月、社会主義伝導行商に旅立つ。九月、田辺の牟婁新報に勤める。三九年二月、菅野須賀子田辺に来、相知る。四月、帰京、堺家に寄食『光』等の編輯を手伝う。四〇年一月、『日刊平民新聞』創刊、社員として編輯部に勤務する。一〇月、下阪、大阪日報に勤める傍ら『大阪平民新聞』(後の日本平民新聞)の編輯を手伝う。一二月、入営即日帰郷。四一年三月、帰京。六月、赤旗事件。七月、判決、千葉監獄に入獄。四十三年二月、出獄。六月、幸徳秋水逮捕。桂首相暗殺をはかって果せず、八月、房州保田へ移る。四四年一月、刑死した菅野に会いに上京する。三月、二六新報に勤む。州崎の新造であった竹内玉と結婚する。四五年、日本新聞に転ずる。十月『近代思想』を大杉と共に創刊する。

彼の文が初めて活字になったのは私の知る限りでは右に述べた東北伝道行商に関する記事である。前年に行われた小田頼造、山口義三、西村伊作の行商に刺激されたこと、母の死後、家庭の桎梏から離れ、ますます社会主義に一途に生きようとする情熱がたかまって来たことから、この行商に新しい一歩を賭けたのであろう。

三八年三月二十六日の『直言』(第二次、創刊二・五、終刊九・十、週刊)に出発の宣言が載り、九月十日に『伝道行商を止む』が書かれるまで、十一回にわたった報告である。その間同じく直言に最初の論稿『嗚呼娼妓』(七・二三)、行商中の訪問をもとにしての『忘れられたる谷中村』(七・二八)、曙会の盟友鈴木秀男の戦死を悼む「嗚呼鈴木秀男君」(八・一三)が書かれている。

『忘れられたる谷中村』は後の『谷中村滅亡史』(四〇・八)に連なるものである。『嗚呼娼妓』が彼の最初の論稿であったのも、自家の職業、生活環境からの実感が廃娼運動と結びついたので自然なことであろう。彼は後にもよく短歌、小説の題材を遊廓に求めているのも生い立ったその環境によるのである。

しかし、それはまた高小までしかの学歴を持たない彼が、安成貞雄、白柳秀湖、大杉栄達と交わってゆく時、劣等意識に悩まされつつ自分の彼らにない特異な生い立ちの経験をもって存在を主張したのだとも言えるのである。安易に素材に寄りかかった短歌を見ると、特に感じるのである。後にまた触れるが。

行商は四月五日に出発し、五月一三日帰京して、七月一〇日に再出発している。その帰京から再出発の間、『ひとすじの道』によれば平民社に出入していた竹久夢二、早大文科の岡某(岡繁樹か?)と同居している。そして安成貞雄(早大、英文科在学中)と知りあい、生涯の交わりを持つようになるのだ。安成は火鞭会の同人である。

『火鞭会告白』が発表されたのは『直言』の四月一六日号である。第一回の集会は五月二〇日である。安成と知りあったことは当然火鞭会の影響を受けていったと考えられるが、漸く上京し、平民社の中に入りかけた一社会主義者としての彼である。その影響の表れは

もう少し時を待たなければならない。(注二)

しかし、竹久と知った。安成と知った。後に安成を通じ白柳秀湖とも交わるようになる。彼の文学へのコースが一つ開かれたことを知るのである。それでは彼のとびこんだ頃の平民社の文学的雰囲気はどんなものであったか、そこのところ一応便宜的に分けてみると、

一つは木下尚江に代表され、また幸徳秋水の『神愁鬼哭』にも見られる政治小説的な文学観であり、一つは火鞭会を中心とする革新的な文学運動であり、一つは前二者程はっきりはしないが、政治か文学かの二者択一に悩んだという堺に見られる巧利主義的な政治と文学の有機的な結合意識であった。そして一般的にはジャーナリストの嗜みとして文章についての教養の要求があったのである。(注三)

いずれにしろ平民社の中には文学が大きな位置を占めていたのである。

それは平民社の運動が、未ださまざまな革新的思想を混じた思想運動であり、社会主義政治運動になっていない点によるのだと言えるのであるが。

彼はこの平民社に自己の生活のすべてを託した。

こんなことがあった。行商の準備のため、四月三・四日と平民社に泊った。その晩、堺、原子基とともに寝ようとすると、蒲団の中に箒が入っているのだ。これはと思うと原子の中には金盥が入っている。堺が寝巻を着ようとすると手が出ない。袖口を縫いつけてあるのだ。それを見て二人の女性が「キユッキユッ」と笑う。二人の女性とは延岡為子であり、松岡文子である。(後の堺、西川夫人)そんな雰囲気は今までの彼の生活にはなかった。(注四)

曙会の仲間達も、母の亡い後の不和な父との家庭生活から求め得ない彼の心の寄り所だった。鈴木の死は単なる同じ会員の死ではなかった。「吁々今春予が慈母は逝き、今また此親友が」逝ったのである。

「予は社会主義において無限の歓喜と絶大の安慰とを得たり」と「哀れな小さき想いを告白し」た時(注五)、自己の理想を託した社会主義そのもの以上に、社会主義者としての同志との生活に、孤独な心の寄る所を見つけた彼の気持を感じるのである。後年、彼を評して「人情主義者である」(注六)という言葉は、いい、悪いは別にして、彼の社会主義との結びつきが、生活感情を主体にしていることによるのであろう。

堺と別れる機会をいくつか持ちつつも(『近代思想』の時、共産党解党の時)別れることがなかったのは堺の性格とともに彼の言うその性格によるのであると思う。

だが、彼がラジカルないい仕事をした時は不思議に堺と離れた位置にいる時というのは堺自身の問題と併せて興味あることだと思うのである。

ともあれ寒村に言わせると文学に趣味を持っていた(注七)という。一体彼のような職業の家に育つと情的な面の発達が早いのは、家が下町の旅館だった自分の経験から見ても理解出来るのである。父母は一日中家業にかかり切りになっている。自然に女中などの奉公人にとりまかれて一人で育ってゆく。しもたやの子供から見れば、早くから無造作に大人の感情の中に放り出されるのだ。はじめて知識に目覚めた少年が求める雰囲気は全くない。読むものといっても祖父の残した講談本か、都新聞(花柳新聞)である。話題といえば

役者の噂、まじめな問題の話相手もいない。そういう中で自意識を持ち初めた少年が孤独になり、内攻的になるのは当然だし、自分の感情を独りで育ててゆく時、物の見方がラジカルになり、激しいほど純粋になるのも当然であるのだ。

はじめての5円のボーナスで買ったのが、藤村詩集であり、透谷全集であるのも判り過ぎるくらい判るのである。

その彼が社会主義協会に入会した晩の歓迎会の席で安部磯雄の「協会の名誉を汚すが如き行為あるべからず、殊に男女関係に就ては厳正なるを要する旨」の訓戒等があった後、「学生風の一青年」が立って「島崎藤村の新体詩『おえふ』を朗吟した」のだ。この青年が白柳秀湖だった。そんなことも思い出されてくる。(注八)

彼は平民社に自己の生活のすべてを託した。彼には未だ何らの立場も、明らかな主義もなかった。ただあるのはヒューマンな激しい共鳴感だけだった。そしてこの中で、泣き、笑い、勉強し、社会主義者として(また文学者として)育っていったのだ。明治期社会主義もここに直系の二代目を生みつつある時なのであった。

九月十日、『直言』が日比谷焼打ちの余波をうけ発行停止を受けた後(同じこの月に『火鞭』が創刊されている)内部の破綻もあって平民社は遂に解散した。

堺の世話で紀州の田辺へ行く。『牟婁新報』に勤めるためである。ここで記者として、編輯者としていろいろ学んだこともその後にとってプラスになっただろうが、それ以上に那須のK・F(藤田某)に対するプラトニックな恋愛、その破局後、二月五日田辺に来た菅野幽月(須賀子)と関係をもつようになったことは、その後の彼の生活にとって大きな影響を与えてゆくのだった。(注九)

その頃東京では、二月に結成された日本社会党が指導した電車賃値上反対の運動は、三月十五日の市民大会が騒擾化して、党員の西川光次郎、山口義三(孤剣)大杉等は検挙されるという事件が起きた。

ために党の活動は全く停頓し、堺に呼び戻されることになったのである。そこで堺家に寄食し『光』(三八・一一創刊、三九・一二終刊、半月刊)『社会主義研究』(三九・三創刊、三九・八・終刊、月刊)『家庭雑誌』(三六・六創刊、四〇・八終刊? 由分社発行月刊)の編輯の手伝をし、夜は正則英語学校に通うという生活が始まる。

再び東京に戻るとともに手伝いではあるが党機関紙の中央に関係するようになったのである。

この年に彼の書いたものを挙げると『棄てられたる谷中村』(光五・五)『同志の運動 小冊子売り』(光五・二〇)『二個の犠牲』(家庭雑誌七月号)『獅子の恩がえし』(少女七月号)『社会党大演説会の記』(光七・五)『噫露国の同志よ』(光九・五)『インバネス物語』(光九・二五)『めぐりあひ』(少女十月号)『殺されつゝある同胞』(光一〇・一五)『うたかた』(家庭雑誌十一月号)『わが故郷』(光一一・一五)『秋の一日』(家庭雑誌十二月号)がある。

主に彼が編輯に携っていた『光』と『家庭雑誌』が舞台だった。ただ『少女』という雑誌に書いているのが例外だが。この雑誌は未見であるが、その広告によれば、宮田暢が中心となり、他に安成貞雄、原真一郎(霞外)、田中久が加わって編輯に当っている。宮田はトルストイ研究会の、火鞭同人の宮田であり、原は第一次『直言』

の編輯・発行人であり、火鞭同人である(田中については不明)。親友安成のいる啓蒙的少女雑誌という線からその執筆も理解出来ると思う。(注十) 七月号の目次を見ると、お伽噺として秀湖、さだを、寒村と名を連ねているのも興味がある。

『光』に載ったものでは『噫露国の同志よ』という詩と『インバネス物語』が注目される。詩は彼の初めてのもので、三行八連の詩で、その一節を示せば

あゝ二千年圧制の　風に凋める民草の
自由の花を革命の　犠牲(にえ)に死したる同胞が
熱き血汐に培かひて美しき姿(は)に咲かしめよ

配天調よりも孤剣調とも言うべき詩である。まだ措辞は生硬であるが、『神愁鬼哭』孤剣のパンフ『革命家の面影』(九・一五)に刺激されて社会主義者として露国革命家に対する浪慢的憧憬が書かせたのであろう。

それに対して『インバネス物語』は九月十一日の第二回電車賃値上反対市民大会を退場した後、安成と日比谷でビラをまいて検束された事件を書いたものである。

人間以外のものに語らせるという形式は古くは『屑屋の籠』(西村天囚二十年)にあり、近くは『吾が輩は猫である』(ホトトギス三八―三九)にあるが、それらの影響というより彼が少年時代読んで子供心に惚れこんだという堺の『当世百物語』の影響を考えることが出来ると思う。(注十一) 秋水が古着屋で買ったインバネスを、彼の入獄の際見送る堺の寒そうな姿を見て秋水が着せかける。そして堺の手許に移ったインバネスをある日大杉が着てそのまま検束される。それを寒村が借用に及んでまた検束される。その寒村、貞雄の検束の模様をインバネスに語らせるのであるが、軽妙な筆致で楽しめるものになっている。その軽妙さは堺のユーモア物をふと連想させるのである。しかし、それだけではない。一着の古いインバネスは運動の歴史である。現に行われている運動をこのように小説風に書いたものは今までになかったのだ。軽い物ではあるが実際運動に参加していて、文学好きの青年しか書けない物だと思うのである。

『秋の一日』は理想社会を空想する小品。『二個の犠牲』『うたかた』『わが故郷』はともに故郷に取材した作品で、『わが故郷』は離れた故郷を思う美文調の小品であるが、他の二篇は具体的な見聞をもとにして書かれている。『二個の犠牲』は廓内で菓子商を営むクラスメートの兄の戦死。残された子まであるその妻の、弟との再婚の問題を扱っているが、小説的構成にいたらず、「かくの如き家族制度を破壊するは吾人の責務である」という結びの素材になっているに過ぎない。しかし『うたかた』になると、前半は多分に小説的構成に留意され情死した若い花魁を描き、幼くはあっても実感をもったものになっている。そして今は華かな芸妓達の行末を思う彼の言葉も抽象的ではない。この作品から『舞ひ姫』が生れるのはすぐであると思うのである。

そして明治四〇年が訪れる。

『光』『新紀元』はともに廃刊し、はじめて日刊紙「平民新聞」が誕生する。菅野と世帯をもつ彼への堺の配慮もあったのであろうが、彼は初めて正規社員となり、多くの先輩達に名を連ねて編輯部に入る。そして創刊号(一・一五)に『舞ひ姫』を発表する。その時の事情については『ひとすじの道』に詳しいので引用すると、

「創刊号の出た日、牛込市ケ谷の菅野の寓居には、私や山口孤剣

の外に当時まだ早稲田の文科に通っていた白柳秀湖、安成貞雄、土岐哀果、佐藤緑葉の諸君が集まったが、同志たると否とを問わずみな昂奮していた。孤剣は第七面にのっている私の『舞ひ姫』という文章を、いつもの癖で一葉の『たけくらべ』を読むようだと大袈裟にほめあげた。安成は土岐、佐藤、若山牧水、仲田勝之助、その他、六人の同窓生と共に『北斗』という回覧雑誌を出していたが、その七人が集って私の『舞ひ姫』を朗々と吟誦したと語った。『舞ひ姫』は遊里にそだった少年が長じて零丁放浪の間にも、薄命な身の上話に同情の涙を流した美しい雛妓を追憶する、すこぶる甘いロマンチックな美文調の物語で（中略）殊に堺さんがわざわざハガキで『舞ひ姫』を読んで胸の迫るような感がした、真実くらい力強いものはない、この意気で大いに努力せよという意味の激励を寄せられた時は、誰にほめられたよりも内心はなはだ得意の感を禁じ得なかったのである。」

浪慢的な青年群の姿が髣髴としてくるではないか。事実、寒村の述べているように、それはロマンチシズムの色濃い、歌いあげたともいえるような作品である。十九歳の若い青年のみが歌える感傷である。社会主義的な作品では毛頭ない。菅野との恋愛に酔う若い心情の作品である。

ともあれ、彼はこの作によって文学的才能を認められたのである。

新刊紹介にも筆をとるようになる。（小山内八千代の『新緑』与謝野晶子選『黒髪』金子薫園『伶人』横瀬夜雨『二十八宿』上田敏『文学講話』等）

短歌も発表している。孤剣の『詩歌の貴族趣味』（平民短歌会の起りし理由）（一・二三）により「平民短歌」の欄が設けられると、彼も十六号（二・五）より二首ずつ八首発表しているが、そのうちの六首は、

欄により閣にながるる新内の　歌に泣く子の髪みだれたる
しめやかに初恋かたる遊び女も　あらんと思ふ　春雨の夜

の如く廓の情景を描く作品である。もちろん二首ながら

革命の天馬かけるよ　夕空に　血煙りのごと雲のみだるる

の如き歌もあるにはあるが。

『舞ひ姫』の成功によって、自分のみが持つ特異な素材に寄りかかった姿勢が見られるのである。が逆に言えばそれほど『舞ひ姫』の成功が彼に与えた影響は大きかったとも言えるのであるが。

ともあれ、菅野との結婚、社会主義者として漸く正規の場を持ち、文学においても自信をもてるようになる。四〇年は彼にとって新しい生活が開ける年に見えた。

しかし、この四〇年は日本の社会主義運動において最も重要な年であったのである。

即ち、二月四日足尾銅山の大暴動。（彼は特派記者西川の逮捕後、足尾へ行く。『足尾騒擾後報』（二・一一）は緊迫した現地の状勢を生き生きと伝えた報告である。）二月五日、幸徳の『予が思想の変化』、二月十四・十五日、田添の『議会政策論』、その中間の二月十日に堺の『社会党運動の方針』が、各々『平民新聞』に発表される。その中で迎えた十七日の第二回日本社会党大会は硬派、軟派、即ち直接行動派と議会政策派の対立を鋭く示す。二二日、結党禁止。そして四月十四日、遂に『平民新聞』は廃刊する。

この激動とともに、せっかくの彼の新生活にも次々と不幸の事件

が起るのである。二月二二日、義妹菅野秀子が死ぬ。結核性脳膜炎であった。(『乙女の死』家庭雑誌四月号参照)死ぬ間際になって結核だったのを知ったのだ。ために須賀子もいつか肺結核になっていたのだった。転勤をしなければならない。その上、彼には徴兵検査が控えている。(『牢獄と兵営』平民、四・一〇参照)彼の生活は「憂鬱極まるものと」なってしまったのである。彼の二度目の詩『流れ木』(平民、四・一〇)は先の詩のごとく主義を歌う詩ではない。彼のその間の生活を反映した沈鬱な四行・八連の詩である。終りの一節を掲げる。

ふと見ればいつしか去りぬ流れ木は
　ああ吾も見ぬ運命の黒き手に
　導かれ　行衛も知らに放浪(さすらひ)の
　旅行く身この流れ木と似通へる

廃刊後、貞雄の弟安成二郎のいる文芸書出版で有名な金尾文淵堂に勤める。そして十月、また堺の世話で彼の旧友吉弘白眼が社長をしている大阪日報(主筆正岡芸陽)に勤めるため、ひとりで下阪する。しかしそれはそれだけの目的ではない。硬派の機関紙になってきた大阪平民新聞(六・一発刊、一一、一五日本平民新聞と改題、月二回刊)の編輯を手伝う狙いがあったのである。翌年三月まで在阪する。

この間書かれたものを挙げると、『島の詩人』(家庭雑誌五月号)『宿屋の娘』(新声七月号)『谷中村滅亡史』(初めての単行本、平民書房、発禁になる)『座布団』(新声九月号)『恋ざめ』(新声十月号)『飯屋』(大阪平民一〇・二〇)『「離愁」を読む』(日本平民一一・二〇)『廃趾』(訳、同一二・二〇)『霜夜』(同四一・一・一)『握り飯』(新声二月号)『盗賊会議』(訳、日本平民三・二〇)等がある。

『新声』はこの頃隆文館に移っていた。(三六・七に佐藤義亮から正岡芸陽に)この隆文館に安成が勤め、白柳が勤めていた。『握り飯』に見るように、ここに書くようになったのは『舞ひ姫』によって彼の才の能を認めた安成のすすめによるのである。

『谷中村滅亡史』、翻訳を除くこれらの作品は自然主義的な私小説である。『舞ひ姫』のような歌いあげた作品ではない。昂ぶった感情もない。その「私」も「今に理想の社会が出来ると思」う(光一二・二五社会主義者の坐右録)社会主義者の彼ではない。悩める時代の青年群の一人である。

この年、漸く自然主義は確立せんとしていた。前年の『破戒』に続き『塵埃』『南小泉村』『窮死』そして『蒲団』が出ている。秀湖も『駅夫日記』(新小説十二月号)を書いた。啄木も前年に『雲は天才である』を書いて明星ロマンチシズムから離れつつある。

『舞ひ姫』の成功により文学へ強く傾斜した彼が、この流れに無関心である筈はない。その上、秀湖の言うように彼の仲間は「自己が過去の生涯の暗黒なる経験を反省して慚恨の情禁ずる能はざるものあると同時に人類幾多の経験に照して、其の自他、共通の苦悶、煩悩たる事を自覚したる時、作者は浅薄なる羞恥の念を脱して、人類が向ふべき経路を描出せんとして所謂実写主義は来れり。」(注十二)そして「少くとも自分は実写主義を最も好き意味に解釈して今の自然主義と同じやうに考へて居た」(注十三)のである。そして、「わが徒は尤も好き意味に解釈されたる実写主義の模型を『蒲団』に於て認める」のであった。「常に新しき思想にふれ青年と共に熟」す時雄が子供ばかりという古い妻からいつしか愛情が「新時代の生命の活

発たる芳子」に移るという「自然の過程に時代推移の急調を偲ばしめたるなどわが徒嘆賞描かざる所也。」「尤も好き意味に於ける社会小説也」とまで『蒲団』を賞している。(注十四) 道学者流の俗な批判に対する強い反撥がここまで言わしめているのかもしれぬが、後年寒村が回顧していうように(注十五)「その批評を一貫せる精神は所謂『現実暴露の悲哀』を通じて『万人共通の煩悶』に触れ、その根底を流るる『人道の光』を認めんとする『火鞭』時代の主張であった。勿論厳密に云えば此の主張と自然主義文学の精神との間には相当深い相異が存するのであろう。」だが「その旧慣と習俗との桎梏に反抗して人生の真に達せんとするに急だった『火鞭』の主張は、差違よりも近似により多く傾いていた。」と言うべきであろう。秀湖の「自然主義は青年の声である」今の時代は「自己意識の急潮に棹して切実に自己を批評しつゝある」時代という見方に、彼の破れさった新生活を重ね合わせると彼流の自然主義小説が生れてくる。しかし其は残念ながら切実な自己批評より生活に疲れた虚無的な姿が先に立っていた。だが「予は此の一巻を通読して実際生活より来れる強き力に触れたり、痛切な自己意識の声を聞けり、げに此の一巻を流るるものは新しい時代の生命なり」と『「離愁」を読む』(日本平民一一・二〇)に書いたように、彼も実際生活の「飾る処なき内的経験の細叙」に白柳、安成と交渉をもちつつ努力してゆくのである。

『島の詩人』『宿屋の娘』は菅野の転地に伴なっての伊豆旅行に取材したものである。

前者は菅野のいた初島を舞台にして、小学校の教員で詩を書いている山田との交渉を、山田の田舎の単調な生活に埋れてしまう心配と焦りを描きつつ、自分の生活に思いをめぐらす、そんな十枚程度の作品である。「過ぎ越し方を想ひめぐらして、苦がい悔恨」を覚える彼の姿に、行きづまった彼の生活を知るのである。『新声』に載った彼の作品も十枚程度のもので伊豆の網代を舞台に、そこの岡田屋という旅館のお徳という女性を描く。淡い旅情のスケッチと言えよう。

『座布団』は新聞社を舞台にし、いつも妻に尻にしかれているので座布団という仇名の男を描いたもので、これもスケッチ風な短篇で、見るべきものではないが、しかしその会話の中で「そうですナ、然し僕は家庭といふものは病気よりも更に恐るべきものだと思ひますネ」「そりゃ初めの間は随分面白いですがネ。然しだんだん年をとつたり(中略)ただもう妻子を餓えさせない為めに奔命に疲れてしまふんです。」と言っている点に彼の生活の投影が見られるのであるが、平面的描写を出ない。しかし『恋ざめ』になると、結婚してから数年経った平凡な会社員(だが妻は病気で長く寝ている)が電車の中で見た女学生への肉欲の感情、帰宅して寝たままの妻に行きどころのない不満をもちながら、「アア、勉強は出来ず思ふ事はやれず、かうして此の儘名も無く埋れてしまふのか。」と、来し方、行く末の焦りの思いを持ちつつ床につく。妻の白いあらわな胸に右手を置く。女学生をふと思い出す。私は「夢うつつで妻の方へすりよつた。」という自然主義の色濃いまとまった短篇になっている。菅野との生活を暗示して、同じ彼の生活の投影と言っても密度の高いものになっている。『握り飯』は平板な日常生活が繰り返される新聞社の中で「最も注目すべき未来を有する新進作家と称された友を思ふと、職場の為に大阪辺りまでやつて来て、煩雑な新聞の編輯に追はれて漸々頭が荒んでゆく自分の身が悲しくなる」作者は、

「学校へ入つて偉くなるのは当り前だ、俺が安城（安成？）や佐伯（白柳？）より劣つて居たつて些とも恥辱になりやしない。」と慰めつつも取残されていく思いに彼は焦る。そして老記者のわびしい姿に自分を映してしまうのである。彼の孤独な感情を伝えている。

この二作は一応まとまったものと言えよう。だが彼の個人生活の煩悶を伝えつつも、ここにはそれ以上のものはない。社会主義と人生、人生を文学といってもいい。それが全く結びついていない。社会主義者としての彼と、『蒲団』亜流の文学者としての彼がいるのだ。そしてこの時期は『舞ひ姫』を出発点として文学者としての彼の最も色濃い年だったとも言えよう。秀湖はその二つを曲りなりにも『駅夫日記』で結びつける。（注十六）寒村がそれをやることが出来るのは、そして実際行動の経験を通してより高めて出来るのは『近代思想』の時期を待たなければならなかったのである。

この文学に傾斜した時期は、赤旗事件（四一・六・二六）をもって打ち切られる。四十三年二月二十五日に出獄するまで千葉監獄にて最初の獄中生活を過すのだ。この間のことは『ひとすじの道』にまた『冬』『一挿話』に詳しい。菅野の離反、秋水を殺そうとする彼の気持。自殺をはかる絶望の彼。

それをすべて打ち消すかのような大逆事件のフレーム・アップ。桂首相の暗殺未遂。文学通り激動の中にもまれるのだ。そして八月失意の身を州崎遊廓で知った一人の女性（竹内玉、後の寒村夫人）の好意を受けて、自己と運動に絶望して房州の保田に身をかくすのである。（注十七）この間、彼の書いたものと言えば、生活費を得るために、安成が選をしていた萬朝報の懸賞小説に書いた『出獄の翌日』（七・一～二）のみである。題名通りのもので、勿論主人公は内田吉太郎という窃盗犯になっているが。（注十八）

菅野が刑死した報を聞いて隠れていた保田より上京したのは四四年の一月二七日のことである。大杉を訪ね、堺宅に泊り、彼は再び同志の中に入ってゆく。同志の茶話会にも出席するようになる。堀紫山、守田有秋（当時二六の記者、不敬事件の時の山川の同志）の世話で二六新報に勤める。そして竹内玉と結婚し一家を構える。赤旗事件後大きく揺れ動いた彼の生活もようやく安定するのである。

この「冬の時代」の中での社会主義者の生活についてはここで今更触れる必要もなかろう。ただ私はその苦しい生活を知るにつけても、ゲルツェンの『過去と思索』に書かれたワヂムの生活が思い出されるのである。

「茶話会」などで同志の連絡をとりつつ、堺は「売文社」を設立する。ここに寒村をはじめ大杉達も集る。次第に小さな城がつくられていったのである。

そして大正元年十月『近代思想』が創刊される。由分社で共に生活した大杉、赤旗事件の同志であった大杉、獄中の仲間であった大杉と、堅氷を打ち破るべく進んで雑誌をつくるのである。それは単なる文芸雑誌ではない。「自由に時事問題を論ずることはもとより困難だが、せめて文芸や思想の抽象的な問題を論ずる雑誌を発行して、同志が再起する中心を作ろう」という雑誌である。秀湖はすでに、逃晦している。安成は友人であり、文学者であっても、社会主義運動に生きる男ではない。そこに同世代の大杉が彼の仲間として登場してくるのである。

長い苦渋の生活から、社会主義運動に第二の歩を進める、文学をもって。

狭い文学意識、個人意識内にとどまっていた彼の文学は（それは彼自身、現時の文壇を批判していっている言葉だが）社会主義者としての彼の眼によって見直される。（注十九）

少年期を回顧しては『舞ひ姫』ではない、『艦底』が書かれる。日露戦争に狂奔していた横須賀で働いていた頃のことである。生活を凝視しては『恋ざめ』『握り飯』ではない、『冬』『夏』『逃避者』が書かれる。

それらはまた次の論をまたなければならない。

（注　一）『講座日本近代文学史』（大正時代）西田勝稿「近代思想」。『現代日本文学史』（筑摩書房）臼井吉見「大正文学史」。山辺健太郎「近代思想」（文学三二・五）。小田切進『近代思想』細目」（立教大学研究報告三四・三）。

（注　二）西田勝「雑誌『火鞭』の成立について」（文学二八・一〇）が『火鞭』については詳しい。

（注　三）風満楼主人「平民社派の文士」（新声四〇・七）の稿がある。『良人の自白』を文壇の改良剣舞ぐらいと木下尚江にいやに点が辛いが、平民社派の文士といわれることもあったという点で。ここで特に秀湖を散文家として、孤剣を詩人として、その将来を嘱望している。

「座談会『堺枯川』」（世界三〇・一〇）参照

（注　四）『直言』（四・一六）堺の『平民社より』から。

（注　五）『直言』（三・二八）『東北伝道行商』より。

（注　六）「私の信条」（世界二五・一一）

（注　七）前掲座談会での彼の発言

（注　八）「非戦論時代」（太陽昭二・八）

（注　九）「牢婁新報」また後に出てくる「大阪日報」はともに未見。

（注　十）明治少女会の名で発行している。児童文学大系の年表にもない。「家庭雑誌」のごとく、火鞭同人のつくった啓蒙的少女雑誌と推察したのだが。

（注十一）「堺利彦先生の面影」（『左の面々』昭二六所収）より。

（注十二）「わが徒の芸術観」（火鞭四〇・一二）

（注十三）「自然主義と虚無的思想」（新声四〇・一二）

（注十四）『蒲団』を読む」（新声四〇・一〇）署名は一記者となっているが後述の荒畑文と併せ秀湖のものと考えた。

（注十五）「社会主義者と文芸」（新潮昭二・八）

（注一六）西田勝「『駅夫日記』の位置」（『日本革命文学の展望』昭三三所収）を秀湖については参照してほしい。

（注十七）『特別要視察人状勢一斑』によれば号花影、小川清と変名して、巡査には社会主義を棄てたと語ったと伝えている。

（注十八）彼の名は懸賞小説には見当らない。しかし苔果生、府下向島寺島村九二七、百瀬晋の署名のあるのが「出獄の翌日」である。百瀬は小説を書いたことはない。最近出獄もしていない。寒村は彼と同居していたことがある。それから寒村作と考えたが、他の作品は判らない。

（注十九）「卑怯者の文学」（近代思想大二・四）

（一九五四年本学日本文学科卒、現東京都立上野忍岡高校教諭）